

Prof. A. Hill Returns

Prof.A.Hillの帰還とロジ裏生活

Season 2, Episode 2



🐥 こういう阿呆な文章を書くせいか、ブログはないんですか、と良く聞かれる。ありません。試みたとしても、超筆無精なので多分3回で終わるであろう。幼少のみぎり、夏休みがもう終わろうかというときに真っ白な日記帳を前に呆然としていた私である。宿題でもないのに、ブロガーの皆さん何であるように毎日のことを書けるのか… 私には謎だ。こんな幼稚な文でさえなかなか書けずうんうん苦しんで、締切を大幅に超過し編集長を困らせているのに（以前は自分が編集長だったので自分を困らせていたが、今では進歩(?)して現編集長のブスカことS先生を悩ませている）。ましてやTwitterになると、理解不能。好奇心で登録してみたが、皆さんの怒濤のようなつぶやきの嵐に打ちのめされた。なぜに世界に向かって四六時中つぶやけるのか… 私には無理。それにしても、ハマコーが「もう寝る」とつぶやいたり、我らが首相が「よめさんが作ったグラタンが美味しかった」とつぶやく世界というのはとてもシニカルだ。「さっき国家財政が破綻しました」とつぶやかれるよりかもしれませんが。（たぶん、私がTwitterの効用を判っていないのだと思う。誰か一から教えてたもれ。）

🐥 以前旅先での失敗談を書いた。出張時のトラブルは様々あるが、やはり恐ろしいのはケガやビョーキである。幸い私は、出張先で頭蓋骨に矢が刺さったり、ブタ鼻曲がり病になったりしたことは今のところ無く、為那都比古大神（いつも初詣に行く近所の小さな神社の祭神である）やピリケンなど多くの神仏のご加護に感謝している。しかし、小さなアクシデントはもうそれこそ毎度である。海外の場合、まずは時差ボケ。年を取ってきて時差ボケか本当のボケだが判然としなくなってきたが、朦朧としたまま講演するなんて、もう朝飯前だ。（一度あまりに眠たくてこれはやばいと思い、喋っている間に寝てしまったら起こして下さい、と言ったらえらく受けた。）次に多いのが、消化器系トラブル。なんでも食べるし、かつ食い意地は人一倍なのに、鋼の胃腸という訳ではないのがいけない（食中毒で皆が倒れる中、自分だけ平気な人っていますよね、羨ましい）。去年はそれで死ぬ思いをした。或るGordon Conferenceに参加後ボストンに出た。東大のN先生らと一緒に夕食を、港の突堤にあるとても見晴らしの良いレストランでとった。ニューイングランドの新鮮な魚介類と冷えたしっかり目の白ワイン。至福のひとつときと言わずして何であろう。とりわけ、生牡蠣が美味しかった。私は牡蠣に目が無い。しかし、大皿の氷の上に恭しく飾られた

牡蠣は一人あたり数個。私は、すぐにカラになってしまった皿を恨めしく呪んだ。2日後に私だけHarvard大で講演しなければならなかったため、次の日は単独行動であったことが私を惨劇へと導いた。前日の仇を討つべく、私は昼食に地元では有名なレストラン・リーガルシーフードに勇んで出かけ、様々な牡蠣を生で1ダースほど堪能した（白状すると、ついでに一緒にハンバーガーも食べました。米国に行くと、マックやキングじゃない巨大バーガーや、パッファローウィングや、カラマリなどの身体に悪いものがすぐく食べたくなるのだ、何故か）。種類が沢山あって迷ったので、つい色々頼ってしまった。Kumamotoという小粒な種類がミルクィで美味しかったが、聞くと熊本産ではなくアメリカ産であった。でも全種類は食べられず、悔しくて（なんでやねん）同じ日の夜、別のリーガルシーフード（チェーン店なのでボストンのあちこちにある。見かけは日本のファミレスそのものだが、魚介は割と新鮮でまあまあです）にまたもひとりで出かけた。うーむ、我ながら子供だ。でも止めてくれる人はいない。昔初めて貰ったアルバイト代を握りしめて、かねてからの作戦通り鰻丼、天井、かき氷（この3つが当時考えつく最上級のご馳走だった）のハシゴ食いをしてきっちり腹をこわした歴史の教訓は全く活かされなかった。三つ子の魂百までも。後先考えずに、またも生牡蠣を1ダース（あれ?もっとだったかも…）。ワインの種類も結構あったし、大満足でホテルに戻りさて明日の発表の準備を、というところからジェットコースターのようにお腹が下り始め（食事中の人ごめんなさい）、誇張ではなく朝までずっとトイレに座る羽目に…

詳しい情景描写は避けるが（誰も聞きたくない）、まさに地獄であった…死ぬかと思った。もう講演は中止だと観念してい



ボストンの港の棧橋にあるレストランからの眺め。ほらよくホラー映画でも最初のはどかな場面が出てくるでしょう。次の日の夜に待ち受ける惨劇のことも知らず、私は平和に、美しい景色を愛でていたのであった。

Prof. A. Hillの帰還とロジ裏生活

だが、旅の友の正露丸を一晩で一瓶飲んだのが功を奏したのか、朝ようやく打ち止めとなったので言うようにして大学へ。睡眠不足と脱水で目を落ちくぼませ、足もふらつき、再発を恐れてへっぴり腰という鬼気迫る姿で1時間に亘る講演を敢行し、あまつさえジョークで笑いも取った私は研究者の鑑である。

次なるクライシスは、年が明けてから台湾で待っていた。台湾の生命科学は今とても活気がある。このとき呼ばれた台南の成功大学（始めは身も蓋もない名前やなあ、と思ったが、聞けば我々も世界史で習った英雄、鄭成功からとったもので由緒ある国立大学だった）ではファカルティも学生もとても熱心で、特に学生の目が輝いていたのが印象的であった。私はとても歓迎され、到着後すぐからびしりとスケジュールが組み、その日も朝から夜まで講演以外に様々な人との面談などが分単位で組まれていた。欧米でもこのような連続面談はよくあるが、台湾の人達は律義だしホスピタリティーに溢れているので、全く時間に隙間が無かった。文字通りトイレに行く暇もなかった。不得手な英会話で防戦一方だと、言い出すこともままならず（研究の転機はいつあったかと学生が真剣に聞いてきている最中に、ちょっとオシッコなどとどうして言えよう）、皆さんご承知のようにしばらく我慢すると波は引くので、それを繰り返しているうちに気付けば夜の帳がおりていた。大勢での夕食会の前にいったんホテルに帰してくれると言うので、やれ嬉しや、これで乗り切ったと思った油断がいけなかった。ホテルまでホストの教授と准教授（両方女性。台湾は女性のPIが多い。日本より進んでいる）が送ってくれる車でそれはやってきた。津波は第1波の後の第2波3波が怖い。ないがしろにされうやむやにされ怒り心頭に発していた生理機構が、チリ地震（今回じゃなく1960年のほう）の後の津波の如く、いや太古にメキシコに落ち恐竜を絶滅せしめた小惑星による高さ

300mの津波の如く、この日のどれよりも巨大な波となって襲いかかってきた！これこそ真正銘のUrgency (stedmanによると医学用語ではurgencyは実際、尿意緊迫を指す)、緊急事態、額に脂汗が浮かび、一生懸命話しかけてくれる教授達の声が遠のく… 名所旧蹟の説明をしてくれているようだが、こちらは全くそれどころではない。うわ、視野が狭くなってきた（ああいうときに本当に視野狭窄起こすことを、身をもって知りました…）。そのような状況下にあることか、有名な建物を見せるために回り道するという… あわあわあわ、駄目駄目、と叫びたいが、言葉を発すると決壊しそうで、意識を車の天井に一点に集中する。組んだ足に全身の力を込める。このまま気を失い、失禁するのか… …中略… …その後、どう乗り越えたのか記憶も無いほど悶絶した。30分ほどの車中が永遠に感じられた。しかし、ともかく国家の名誉をかけて乗り越えました（意味不明）。死ぬかと思った。以前、薬学会に呼ばれて仙台空港から市内に向かうバスでも同じような目にあったことがある。初めてで、バスがあんなに時間がかかるとは知らず、トイレを済ませておかなかった。機内でビール飲んじゃってるし、バス待ちの間猛烈に寒いし…（今では速い電車が走っているので安心）。バスは学会参加者でいっぱい、ここで漏らしたらもう研究者としてやっていけない、と絶望の淵に立った。今回は、そのときを上回るA. Hill危機一髪であった。この「台南の大受難」は、後々語り継がれることになるであろう（自分のなかで）。時々夢に見るし。いやあ、今書いていても切迫感が蘇り、手に汗をかいてしまった。他に便秘で死にかけたこともあって…、え？ もういい、聞きたくない、こりゃまたしつれーいたしました（©植木等。今のヒトは知らないか…）。

ここからは上品な話になるのでご安心を。私が敬愛してやまない研究者に〇〇先生がいらっしやる。私がA. Hillだから、仮にProf. A. Killとしよう。Kill先生は、業界で知らぬ人のない日本を代表する生命科学者であり、国内外の数々の賞を取られ、はちみつきんかんのど飴を作っている会社と同名の有名な賞を受賞されるのも時間の問題と言われている。その研究業績には本当に圧倒される。お顔も、こわもて、もとい、学者らしい謹厳な感じで、偉大な研究者のオーラと相俟って少し近寄りがたい雰囲気がある。しかし私は、フフフフ、世間ではほとんど知られていない先生の別の面を知っているのだ。例えば、それはある秋の日、米国から当地を訪れた教授を歓迎する晩餐の席でのこと。私もお相伴にあずかり、畳の個室で、フルコースの懐石料理（松茸を何年かぶりに頂きました。美味しかったあ。料理の描写を始めると止まらなくなるのでやめておくが）。研究の話などをしながら、宴は和やかに粛々と進み、色とりどりの料理が次々と運び込



待ち受ける大受難のことも知らず、台湾大学から101階建ての台北101を望む。（本当は台北に行ったのは大受難の後。）

Prof. A. Hillの帰還とロジ裏生活

まれる。そのなかに特大の「ひしのみ」があった。それをしげしげと見ていたKill先生が突然小声ながら「♪チャラララララ、バットマン、バットマン、バットマン♪」と歌い始めたのだ。あっけにとられる米国の教授。そうなのだ、Kill先生、実は昔々テレビっ子で、特に米国製アニメに夢中だったので今でも条件反射を起こしてしまうのだ(ひしのみが何故トリガーになったのかは図を参照)。私は先生より年下だが、同じ頃にやはりテレビに齧り付いていたので、懇親会などで先生と一緒にいると、しばしば昔のテレビの話で盛り上がる。我らは、元祖テレビっ子だ(胸を張ってどうする)。バットマンも今の重厚な映画のじゃなくて、いか



右が問題の蓮の実。蓮は蓮のような水草で、実は茹でて食すと栗のような味わい。そして左がバットマンのシンボルマーク各種。確かにね…連想はするかも

にもアメリカな軽快なメロディと共にやってくるアニメのバットマン。そしてご存じトムとジェリーやポパイ、さらにはロードランナー(ウィウィと啼きだけでしゃべらず高速で走る鳥を、コヨーテが知恵を絞って捕まえようとするも、あり得ない展開でいつも逃げられる)、マイティハーキュリー(最後に必ずオリンピアーと叫んでオリンピアに去っていく)、ディックトレシー(探偵だけど、手下にサヨナラーと叫ぶ眼鏡出っ歯の日本人が居た) などなど… それからアニメじゃないがミステリーゾーン(テレビの故障ではありませんというナレーションで始まり、ちょっと怖かった)。今と違って刺激に乏しい時代の素朴なハナタレ小僧(昔は子供ってよく鼻垂らしてたけど、今の子そういえばたらしけてないな…)をイチコロにするアメリカ文化の洗礼。国産も、例えばアトムの実写版のようなマニアには堪えられない変なものが放映されていた(電話ボックスで何かの番号を回すと地下基地にすんと落ちていく、っていうのを憶えている。アトムの肌色の全身タイツが情けなかった…)。実写版アトムの話しをされるとKill先生の目が輝くこと輝くこと、講演のとき以上である。私は先生の研究も尊敬しているが、この少年に戻ってしまっているときの先生が大好きである。

話は変わって、ラボのHPの私のプロフィールの欄(随分以前に書いたものだが)に、「怖いもの」という項目がある。最初がまんじゅう。その後タルトタタンやワインなどが列挙されている。これでもう皆さん理解して下さると勝手に思っていたら、世の中甘くはなかった。あるとき某大学に講演に出かけ、食事に連れて行って頂いた折に、ホストの先生が真顔で「先生は、ワインは身の毛がよだつ、ということなので、和食にしました」とおっしゃる。えええ、ちゃうがな、ちゃうがな。反対やがな… まあ和食も好きだから別に構わないが、もしかして今

までHPのせいで好きなものを食べ損ねたり貰い損ねたりしているのでは、という疑念がふつふつと湧いてきた。追い打ちをかけるように、別の人に「先生はワインがお嫌いだからワインの話しをしないようにしていました。」と言われたし。がーん、である。まあ考えてみれば、落語を聞かない人もたくさん居るわけで。民主党は、落語を義務教育における必須科目にすべきだ。

今回は、今マイブームの苔の話しや、靴下のマイコレクションの話しをするつもりだったのに、前置きだけで相当紙面を使ってしまった。そろそろ「お後がよろしいようで」。チキチャンリンチャンリン…

*付記1: プログはないけれど、このアホエッセイのアーカイブは研究室のHPにあります。

<http://saibouseigy.com/jp/blog/> はっきりいって、一貫してアホだ。読み返して自分で呆れた。

*付記2: ブタ鼻曲がり病は、百日咳菌の類縁の気管支敗血症菌(*Bordetella bronchiseptica*)が産生する壊死毒(ボルデテラ壊死毒、DNT)によって起こる。正しくは萎縮性鼻炎による鼻甲介骨の形成不全。(阪大微研の堀口先生のHPの受け売り。写真も)あなたがブタでなければ、罹らない、たぶん。

*付記2: 「死ぬかと思った」というタ



Prof. A. Hillの帰還とロジ裏生活

イトルの本が存在する。元々はウェブ上の人気投稿コーナーのようで、本もかなり巻を重ねている。戦争で死ぬ思いをしたとかではなく「死ぬかと思った」というセリフで締めくくる市井の“笑える”体験談集。以前留学中の後輩に貰って飛行機で読んだが、やはり生理現象系で死ぬ思いをした人が多い。私の体験なんか初級と思わせるすごいのがいっぱい出てきます。

* *付記3: Prof.A.KillとA.Hillは、研究の才能については月とスッポンだが、それ以外ならテレビっ子だったことその他にも似ていることがある。惜しくも最近亡くなった忌野清志郎の名曲の替え歌で、私の気持ちを表現すると、

「♪僕の好きな先生…中略…僕と同じな～んだ～教授会が嫌いなさ…僕の好きな先生…劣等生のこのぼくにすてきな話しをしてくれた…僕の好きな先生♪」(註:私の推測であって



**shinuka
to omotta**
死ぬかと思った

本当に嫌いかどうかは未確認。)

*付記4:私のプロフィールは以下を参照されたい。まんじゅう怖い、まんじゅうが好きだという意味です、くれぐれもお間違いの無いように。

<http://saibouseigy.com/jp/member/post-3/>